

要旨

【研究の目的】 研究の目的は、子どものがんの発病、病との闘い、子どもの死を迎えるという文脈での母親の生きる力とは何か、それは母親をとりまく社会的相互作用のなかでどのように生まれ、どのように、何によって変容していくのかという母親の生きる力の軌跡を説明する理論の生成である。

【研究方法】 研究デザインは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) による質的記述的研究で、哲学的基盤を Child and Family Centered Care とした。対象者は、子どもとの死別後1年以上経過したがんの子どもの母親12名で、半構造化面接、思い出の品の共有、面接時の観察によってデータ収集を行った。データ分析は、M-GTA の手法を用いた個々の“その人”の事例分析とその統合という2段階の方法で母親の生きる力の軌跡を記述した。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認 (19-A093) を得て実施した。

【結果】 「子どものがんの発病から死を迎えるまで子どもの病と闘った母親の生きる力の軌跡」は、“母と子がともに生きる世界観” (中心のカテゴリーは **【【母親であり続けるということ】】**)、 “希望と時間の意味づけの変容” (中心のカテゴリーは **【【希望と絶望の矛盾に折り合いをつける】】**)、 “母親であるというアイデンティティの変容” (中心のカテゴリーは **【【無意識に変容される“母親”の定義】】** **【【苦しみからの一時的解放を許す他者の存在と支え】】**) で構成され、それらが密接に関連しながら母親の生きる力を生み出したり、維持したりするプロセスであった。この軌跡は、子どもの病の経過や時間軸に依存するのではなく、母親が“今”という時間をどのように意味づけるかに依存する4つの“軌跡の局面”をもち、母親はその局面を彷徨ったり、逆戻りしたりしながら、次の局面へと移行していた。なかでも <子どもからの終焉の合図> は、子どもの死が近づいてきた時期の母親の生きる力の軌跡に大きな転換を生じさせ、母親がその合図に気づくと子どもの生を運命にゆだね、母親も子どもも病との闘いから解放されることが示された。母親の生きる力は、既存の希望やアイデンティティとの関係のみで説明できるものではなく、 **【【母親であり続けるということ】】** **【【子どもの生の発現する姿】】** に代表される母子の唯一無二の関係性のダイナミズムから生み出される、母親だからこそ持つ独特な強さが根源となっている。同時に、子どもが本来持ち備えている脆弱な存在ゆえに周囲を突き動かす力、病との闘いという独特の世界観のなかだからこそ新たに生じた、子どもの主体的な自我の力によって母親に与えられているものでもあった。母親の生きる力は、絶望的な文脈におかれてもなお存在し母親を後押しし続けるという、超越的な性質をもつものであった。

【結論】 本研究で記述した母親の生きる力は、これまで説明されたことのなかった苦しみや絶望をも包含した本来持ち備えている生きる強さであり、子どもの病との闘いと深い悲しみを経験した本研究の対象者の語りのなかでこそ見出された、人間の存在論にかかわる重要な、新しい概念である。また、究極の苦しみのなかを生きる人間の生きる力の説明や理解をも可能にする発展性をもつと考える。

Abstract

Objective: This study aimed to generate a theory that explains how mothers of children with cancer have the strength to live in the context of their children's cancer journey and death through their social interactions.

Methods: The research design was a qualitative descriptive study using a modified grounded theory approach (M-GTA). The participants were 12 bereaved mothers. Data were collected through semi-structured interviews and sharing of memorabilia, and analyzed using the M-GTA in two stages: case analysis of the individual and its integration.

Results: The trajectory of the strength to live of mothers who struggle with their children's cancer and death consisted of three aspects: (1) worldview in which mother and child live together, (2) transformation of hope and meaning of the time, and (3) transformation of mother's identity of being a mother. These aspects were intricately related in creating and maintaining the strength to live. The trajectory had four phases determined by how the mother meant the existing time with her child. The mother wandered around the phases, returned to the previous phase, and finally moved to the next phase. In the trajectory, the mother found hope, defined herself according to the context, and created the meaning of life, which is "to continue being a mother," even amidst suffering, despair, and deep sorrow through the dynamism of the relationship between her and the child. A mother's strength to live is transcendental and allows her to deal with difficult situations. In addition, the strength is created by a child with an independent ego and given to the mother to help her.

Conclusion: The description of a mother's strength to live is an important new concept related to human ontology, which was found only in the narratives of the participants of this study. Additionally, human beings' strength to live in ultimate suffering can be explained.